

創世記32章24－31節 「自分の力が折れた時」

1A 折れたヤコブ

1B 信仰の人

2B かかとをつかむ力

1C 長子の権利

2C イサクの祝福

3C ミツパ

4C 神と争う人

2A 腿の関節を外す方

1B 選びによる愛

2B 約束の実現

3B 祝福の神

3A 泣いて願うヤコブ

1B 主の宣言する「幸いな人」

2B 弱くされても、主に向く人

3B 主を知りたい願望

4A 足を引きずって受ける恵み

本文

創世記 32 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、30 章まで来ています。午後礼拝で、その続き 31-32 章を見ていきますが、今朝は、神のご計画全体の中でも重要な、一つの出来事に注目します。32 章の最後、ヤコブと神の御使いとの格闘です。24 節から 31 節までを読みます。「²⁴ ヤコブが一人だけ後に残ると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。²⁵ その人はヤコブに勝てないのを見てとって、彼のももの関節を打った。ヤコブのももの関節は、その人と格闘しているうちに外れた。²⁶ すると、その人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」ヤコブは言った。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださなければ。」²⁷ その人は言った。「あなたの名は何というのか。」彼は言った。「ヤコブです。」²⁸ その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたが神と、また人と戦って、勝ったからだ。」²⁹ ヤコブは願って言った。「どうか、あなたの名を教えてください。」すると、その人は「いったい、なぜ、わたしの名を尋ねるのか」と言って、その場で彼を祝福した。³⁰ そこでヤコブは、その場所の名をペヌエルと呼んだ。「私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた」という意味である。³¹ 彼がペヌエルを通り過ぎたころ、太陽は彼の上に昇ったが、彼はそのものために足を引きずっていた。」

なぜ、私が今、「神のご計画全体の中でも重要な、一つの出来事」と言ったかを説明します。これ

まで私たちが見てきた人物、アブラハムにしても、サラにしても、新たな名が主から与えられたら、その前の名は、ほとんど使われません。アブラムに対して、主はアブラハムという新しい名を与えました。サライは、サラという名が与えられました。けれども、ヤコブについては、イスラエルという新しい名が神から与えられましたが、その後、イスラエルの名だけではなく、ヤコブの名もずっと使われていくのです。

例えば民数記、24 章 17 節「私には彼が見える。しかし今のことではない。私は彼を見つめる。しかし近くのことではない。ヤコブから一つの星が進み出る。イスラエルから一本の杖が起り、モアブのこめかみを、すべてのセツの子らの脳天を打ち砕く。」実は、この箇所から、最近、「イスラエル外交史」¹という本の日本語版が出版されました。その著者は、イスラエル人で外交の専門家であると同時に、正統派のユダヤ教徒です。聖書を神のことばと信じていますが、現実のイスラエルの外交を、聖書の時代から論じています。「星」というのは、イスラエルにとっての理想で、「笏」というのは王の力を表していて、現実的な対応を挙げています。

非常に興味深いですね。私たちの信仰生活でも、この狭間で揺れませんか？聖書に書いてある神のことばの約束は、全くその通りでアーメンであります。けれども、実際の日常における対応で、そのみことばがどのように適用されるかで、悩めますね。例えば、保険に加入すべきかどうか？など、いかがでしょうか？まるで自分が病にかかる、事故に遭うみたいなことを考えているのが、不信仰的に感じることはないでしょうか？

しかし、聖書は現実的な対応を無視していません。例えば、パウロは、教会において、やもめの支援は、本当のやもめだけにしなさいと教えていました。若いやもめは結婚し、また、扶養する家族がいれば、家族に世話をさせ、教会が金銭的な負担をしてはいけなと教えています。教会にあるお金は限りがあるからです。けれども、限りがあるという現実だけで動いているのではなく、むやみに物を与えれば、あり余った時間で良からぬことをやったり、言ったりして、その人をだめにしてしまうのです。健全に、主に拠り頼んで生きることができるようになるためにも、支援しないことも知恵です。現実的なことに対する対応と、信仰を持って生きることの健全なバランスが必要です。

聖書全体では、イスラエルの民がいかに、現実的な敵に囲まれて自分たちを守るかなど、律法によって教えられます。しかし、自分たちがどうしようもない時、主が必ず助けてくださるという、奇跡の証しに満ちています。それが、はっきり現れるのが終わりの日です。イスラエルのためにメシアが来られ、神の国が建てられますが、彼らは患難の中から救われることが預言しています。全世界の軍隊が攻めてくるのですが、彼らの力が尽きてしまい、それで救いを主に求めます。メシアが来られて、この方がかつて、突き刺された方、十字架につけられたイエスであることを知り、涙を流して悔い改めることが、ゼカリヤ書 12 章に書いてあります。そして、ダニエル書では、御使いが

¹ <https://myrtos.co.jp/?pid=186320443>

ダニエルにこう宣言しています。「それは、一時と二時と半時である。聖なる民の力を打ち砕くことが終わるとき、これらすべてのことが成就する。(7 節)」

ヤコブというのは、自分で何とか対処する力を象徴しています。「かかとをつかむ者」です。しかし、主は、ももの関節が外れて、何もできず泣いているヤコブに、「あなたは、神に勝った」と言われました。それが、イスラエルの意味です。自分で何もできなくなった時、主が自分を治める時、それが神に勝ったということになります。

1A 折れたヤコブ

1B 信仰の人

ヤコブは信仰です。彼は、物質的な繁栄ではなく、とてつもなく神を求めていました。アブラハム、イサクに与えられた神の約束を信じていました。その祝福を、貪欲なまでに求めていました。それが現れるのは、天のはしごの夢です。主が見せた、とてつもない大きな祝福のご計画に対して、寝ていた石の枕を立てて、それに油を注ぎ、ここは神の家だと言いました。

2B かかとをつかむ力

しかし、彼には、「自分の力で神の祝福をつかむ」とする特徴がありました。そして、自分の力でつかもうとするとところで、争いと葛藤の絶えない生涯を送ることになります。後に、ホセアの預言によって、神がこう語られます。「12:3-4 ヤコブは母の胎で兄のかかとをつかみ、その力で神と争った。4 御使いと格闘して勝ったが、泣いてこれに願った。ベテルでは神に出会い、神はそこで彼に語りかけた。」ヤコブが、神の御使いと格闘します。それは、彼が生まれる時、エサウのかかとをつかんで出てきた、その力で格闘したとあります。ずっと、この力で生きてきました。

1C 長子の権利

長子の権利を、エサウから奪った時がそうでした。リベカには、「兄が弟に仕える」という、主からことばが与えられていました。母がヤコブに、伝えてなかったことはないでしょう。ですから、長子の権利は、エサウにはないはずなのです。それを、彼は自分の力で、一杯の汁と引き換えに、時分に売りなさいと言ったのです。

2C イサクの祝福

そして、自分をエサウだとイサクに偽って祝福を受けたことも、この力によってです。父イサクが、エサウの射止めた獲物の肉が好きで、それでエサウを愛していました。それで、イサクに与えられていた神の祝福の約束を、エサウに受け継がせようとしていたのです。そのことを知った母、リベカがヤコブに、エサウのふりをして、祝福を受けるように言いつけます。それで、あなたはエサウだね？とイサクに尋ねられた時に、はっきりと、エサウですと答えて偽っています。

ヤコブがアブラハムと、イサクの約束を受け継ぐのです。そして、エサウは長子の権利を軽蔑し、そのエサウをイサクが祝福しようとするのは、とんでもない過ちです。しかし、ヤコブは自分の力で、そのことを獲得しました。そのため、争いが尽きなくなったのです。彼は、自分の力で約束のものを手に入れようと争ったので、争いや葛藤がさらに増えました。エサウがヤコブを憎み、殺そうと考えたのです。そのために、逃げるようにしてイサクの家を出ていかねばなりませんでした。

3C ミツパ

そして午後礼拝で、ヤコブが、伯父ラバンの下で働いて、ひどい目に遭っていました。しかし、主は彼の羊の群れを祝福されました。それでヤコブは、ラバンを恐れて、何も知らせずに妻たちと子どもたち、また羊とやぎの群れを連れて出て行きます。彼はとても賢く、人間が考え得る最善のことをしていますが、それでも、追いついたラバンと激しい言い合いがありました。そして、ミツパという名を付けて、互いに害を与えない約束事を交わします。それは、「見張りをする」という意味合いの言葉ですが、主が見張りをするようにという、ラバンとヤコブの間の争いを表している言葉です。

4C 神と争う人

そして、ヤコブは故郷に戻る旅をします。しかし、エサウが四百人もの人を連れてやってきているという話を聞きます。彼は恐れました。そして、宿営を二つに分けます。一方が襲撃されているうちに、もう一方が逃げることができるからです。そして、祈りますが、その後すぐに、彼を宥めるために、贈り物を何回かに渡って前もって渡すように手配しました。ここでも、兄のかかとをつかむ、あの力で、自分たちに危害が加えられないように動いているのです。

しかし、今、その相手は神ご自身です。これまでは、エサウ、イサク、そしてラバンでした。しかし、今は、エサウがやってきているのを、神ご自身が御使いを送って守っておられるのに、それでも自分の力で守ろうとしているヤコブに、神ご自身がご介入されているのです。自分の力でこれまでやって来たけれども、自分ではどうしようもできなくなっているところで、それでもものがこうしている彼に、神が、まるで相撲やレスリングのようにして、格闘によって抑えていると言ってよいでしょう。

2A 腿の関節を外す方

25 節に「その人はヤコブに勝てないのを見てとって、彼のももの関節を打った。ヤコブのももの関節は、その人と格闘しているうちに外れた」とあります。ヤコブは、これまで主が約束されていることを自分の力でやってきました。ここで滑稽なのは、その妨げになるような要素を自分の力で出し抜いてきたのですが、今、ここにおられるのは神ご自身なのです。同じように、神ご自身と格闘して、それで自分の力で出し抜こうとしています。

神も、その力があまりにも強いので、ものの関節を打ちました。彼が、主に強いられるようにして、明け渡す瞬間です。彼の生涯で初めての経験であったでしょう。自分の力を全く使わずに、すべて

主にお任せするのですが、その力が抜けなかったので、主ご自身が抜かしたのです。

私たちの主、イエス・キリストは、ゲッセマネの園でそのことを果たされました。血が出てくる、もたえ苦しむ祈りを献げられました。「ルカ 22:42-44 「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように。」43 「すると、御使いが天から現れて、イエスを力づけた。44 イエスは苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。』」そして、十字架の上で死なれる時に、大声で叫ばれました。「23:46 父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」この「ゆだねる」は、俎板の上の鯉のように、すべての力を抜いて、明け渡すことを意味しています。

それをする事ができるように、主は彼の腿の関節を外されたのです。

1B 選びによる愛

ヤコブは、自分の力で祝福を得ようとしていましたが、主ご自身は、ヤコブの行いとは関わりなく、彼を愛し、彼を選んでおられました。実に、リベカの胎にいる時に、ヤコブが何か良いことも、悪いことを行う前に、「兄が弟に仕える」と言われていたのですから。

2B 約束の実現

そして、エサウから逃れて、リベカの親戚の家に旅している時、ベテルで、天のはしごの夢を見て、彼がアブラハムとイサクに対する祝福の約束を受け継ぐことをお見せになっています。

3B 祝福の神

そして、ラバンのところで仕える時も、ヤコブに対して、ご自身がベテルの神であると宣言され、彼が、ラバンの羊ややぎの交配をしている時に、ヤコブのものとなるように、縞毛や斑毛のものが生まれるようにされたのです。確かに、大いに祝福されたのです。

ヤコブは、自分の行いに関わらず、それでも主は一方的に祝福してくださることを知る必要がありました。だから、その腿の関節を外すことは、彼にとっては何もできなくなるので、ものすごく辛いことですが、そのことが必要だったのです。

3A 泣いて願うヤコブ

本文 26 節には、「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださなければ」とあります。これだけを見ると、ヤコブが優勢のように聞こえます。しかし、ホセアの預言にあるように、彼は泣いていました。

1B 主の宣言する「幸いな人」

自分が何もできず、それで、ただ嘆願するしかなかったのです。しかし、それが良かったのです。自分には何もないことを、聖書は「貧しい」と言います。物に事欠いていることだけが貧しいのではありません。「詩 70:5 私は苦しむ者 貧しい者です。神よ 私のところに急いでください。あなたは私の助け私を救い出す方。【主】よ 遅れないでください。」苦しくて、自分でなんとかする余力が、全くないです、ということです。しかし、主イエスは言われましたね、それが「幸い」とであると。「マタ 5:3 心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」

そして、この方がヤコブに与えた名は、「イスラエル」です。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたが神と、また人と戦って、勝ったからだ。」とされています。イスラエルの名の意味について、いくつかの解釈があります。まず、「神と争う者」であります。次に、「神が支配し、治める」という意味もあります。それから、「神の王子」という意味さえあります。いろいろな意味合いがあるのですが、一貫しているのは、「弱くされている時に、神に勝利している」ということ。それは、神に治められているからだ、ということ。また、弱くされたので、王子になっているということです。私たちは、主の前においては、「負けるが勝ち」というのは本当なのです。

2B 弱くされても、主に向く人

ヤコブは弱くされました。貧しくなりました。しかし、彼は、「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださなければ」と泣いて懇願しました。これが大事です。自分が弱くされて、それでも、「主よ」と呼んで、主に向く人もいれば、自分が弱くされて、主から去ってしまう人もいます。主から去ってしまう人で思い出すのは、金持ちの青年です。彼が、今まで自分の力で、神の戒めを守ってきたと思っていました。けれども、貧しい人に自分の財産を売って、施しなさいと主が言われた時に、「マルコ 10:22 すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。多くの財産を持っていたからである。」とあります。

けれども、ヤコブは主に向き続けました。同じように、ペテロもそうでした。主が、網を降ろしなさいと言われて、降ろしたら大漁でした。それで彼は言います、「ルカ 5:8 主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。」私から離れてくださいと、ペテロは言っていますが、「主よ」と呼んでいるんですね。自分が罪深いからといって、主に背を向けるつもりはありません。むしろ、この方が、単にラビ、ユダヤ教の教師ではなく、主ご自身であると知ったのです。

3B 主を知りたい願望

そして、ヤコブは、19節で「どうか、あなたの名を教えてください」と言っています。これは、この方の存在の本質を知りたい、ということです。直接は答えず、祝福していますが、ヤコブは、ここをペヌエルと名づけました「神の御顔」という意味です。彼は、神ご自身であったことに気づいたのです。「私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた」と言っています。

後にモーセも、主に対して栄光を見せてくださいとお願いします。けれども、主は後ろ姿だけお見せになりました。そして、ご自分の名を宣言して、その栄光をお見せになりました。モーセもまた、主を知りたいという願望が強かったのです。

4A 足を引きずって受ける恵み

ですから、ももの関節が外されていることは、神の恵みです。彼は、31 節、「**彼がベヌエルを通り過ぎたころ、太陽は彼の上に昇ったが、彼はそのもものために足を引きずっていた**」とあります。足を引きずったまま、エサウに会いました。彼は、もう逃げることはできませんでした。しかし、主は、エサウの心を変えておられました。33 章を見ますと、エサウはヤコブに害を与え、殺そうとはしておられず、涙を流して抱きしめ合っているのです。主が、エサウの心を変えてくださったのです。

ヤコブは、自分の力で事を行おうと、ずっとしてきました。それで争いが絶えませんでした。彼自身も、苦勞が多かったです。しかし、何も力がなくなって、主にただ任せるだけの時に、自分にはどうにもできないことが、ものの見事にできたのです。人の心を変えたのです。

私たちにとって、何が、折られなければいけない力になっているでしょうか？一人一人が、俎板の鯉のように、主にすべてをお任せしないとイケないことはありますか？明け渡す時に、私たちは勝利者となります。主が、ご自由に働き、ご自身が支配してくださるからです。